

国際化へ向けて私がすべきこと

公文国際学園中等部1年

はやし ふたば
林 双葉

交通手段の発達やインターネットの普及により、「世界」がどんどん小さくなっている現在、私たち若い世代に何が求められているのだろうか。それは、世界の人々と切磋琢磨し、オープンマインドでお互いを理解し尊重すること。日本人の良さである優しさと「以心伝心」の心を持ちつつ、自信を持ち相手と関わっていくコミュニケーション力なのではないだろうか。

7月9日に起きた西日本豪雨は、時間が経つにつれ、重大な被害が明らかになっていった。実家が広島にある母の友人が写真をEメールで送って来てくれた。土砂で覆われた茶色の光景となってしまった広島の写真を見て、言葉を失った。スクリーンを通して見るよりも現実起きたことなのだ実感できた。また、被災者の方々の悲しみや悲惨な生活環境を思うと、心が痛み、何もできない自分の無力さを感じた。断水が起き、給水車に並ぶ住民の姿をテレビで見て、私は幼い頃に見た東日本大震災のことを思い出した。当時私は6歳だった。父の仕事で海外に住んでいた。この時も被災地の大変な状況と共に被災者の方々がきちんと列に並び、水や食料を求める様子が海外でもニュースで流れた。周囲の外国人に「これほどの大変な状況下においてもなぜ日本人は列を作って並べるのか。私の国では物資の争奪戦が起こり、大混乱が生じることだろう。日本人は常に冷静で規律正しく行動し、本当に素晴らしい。」と褒められ、誇らしかったのをはっきりと覚えている。

私が海外生活をしていて、外国人を含めてたくさん友人がいたが、その中でもひととき仲良くしていた日本人の友人がいた。日本から引っ越して来た私に、その友人は親切に手取り足取り現地の生活について教えてくれた。彼女は非常に友人思いで、文武両道に励み、明朗快活な人だった。数年間、海

外生活を共にし、彼女は先に日本に帰国した。しばらくして連絡を取ってみると、その友人はなんと治療施設で過ごしていることを知った。海外から帰国し、人より目立ったことや、外見が多少ふくよかであったこと等から友人からいじめられる対象となった。遂には精神的に追い詰められ、拒食症となり、一旦、一般の学校を離れ、回復を目指し治療施設に入ったのだそうだ。リーダーシップを持ち、私をサポートしてくれた友人をその様な状況に追い込んだ周囲の環境に憤りを感じた。

日本人は単一の民族の中で生活してきた。その結果、優れた点として、前述の災害時であっても、きちんと列をつくりモラルを守るといった素晴らしい文化が出来上がったのだろう。一方、単一民族であったが故に、同質性が重んじられ、他者と異なることを嫌ういわゆる「出る杭は打たれる」というような傾向にあるのではないだろうか。幸い私の友人は長い時を経て、快方に向かっているそうだが、彼女が経験したような辛い思いは、二度と誰にもしてほしいくない。

そのためには、オープンマインドで自分と異なる価値観を持つ他者を認め、尊重しあうことが必要だ。今後私はより広い視野を持ち、全体をとらえて高い視野から物事を見るように心がけ、また、コミュニケーション力を高めるために自身の語学力を一層磨く。その上で、周囲の友人に、個性を大事にする海外の文化や、優しくモラルを大事にする日本の心を発信し、異文化に対する理解を深めていけるように尽力していく。周囲に馴染めない友人がいれば話を聞く。今の私に出来ることは、日本を真の国際化に向けるほんの小さな初めの一步にしか過ぎない。しかし、このような「草の根活動」がいずれ周囲に影響を与えるようになる。